

グリム童話と『日本の昔ばなし』の比較

— 恋愛結婚を巡って —

太田伸広

要旨：グリム童話では、恋愛結婚の話の数は他の結婚の話を圧倒し断然第1位である。『日本の昔ばなし』にはそれと比べうる恋愛結婚の話は一つしかない。グリム童話では、恋する女性の多くは自立しており、意欲的、積極的である。自由と愛を謳歌している。そして恋の自由としばしば衝突する家の利害も、いざ結婚となると、王家といえどもまったく姿を消す。また、不幸な恋愛結婚もない。これがグリム童話の魅力の一つと言えよう。これに対し、日本の『謎婿』の長者の娘の意思や感情は、家の支配の下で沈黙している。態度も控えめで、大人しく、内向的である。恋愛結婚の数の面からしても、内容の面からしても、『日本の昔ばなし』には、女性の自我の覚醒は見られない。ただ、元来真摯なはずの恋愛と結婚が『日本の昔ばなし』ではユーモラスに語られる。この辺りが『日本の昔ばなし』の魅力の一つかもしれない。

はじめに

グリム童話には結婚はつきもののような気がする。ところが、日本昔話には、結婚話はあるものの、それほど多くないような記憶がある。実際はどうなのであろうか。また、どんな種類の結婚があるのであろうか。それから、グリム童話と日本昔話の結婚の話に、何か違いはあるのであろうか。あるとしたら、どんな違いがあるのであろうか。いろいろと興味をそそられるところである。これから、グリム童話と日本昔話の結婚の話を細かく分析して、比較し、その全体像を明らかにしようと思う。

今回は、そのほんの一部に過ぎない恋愛結婚に論文のテーマを限定して、分析する。しかも、日本昔話と言っても、すべての日本の昔話ではなく、関敬吾氏編集の『日本の昔ばなし』に分析の対象を限定する。日本の昔話は、恐らく1000近くはあろう。その中には多くの類話がある。厳密な意味の分析では類話をすべて避けなければならない。その際、類話か否か、原話か手を加えたものか、どれほど手を加えているか、それともまったくの創作か、という問題も避けて通れない。編者が話の筋が変わらないように手を加えた昔話でも、結婚の種類は原話とまったく異なってしまう場合もあるからである。それらの課題は今後の課題とし、今回は分析の対象を関敬吾氏の『日本の昔ばなし』（岩波文庫）第I、第II、第III巻の240話に限定する。関敬吾氏は、口承されてきた昔ばなしに手を加えることを極力さけて編集していること、『日本の昔ばなし』は同氏の『日本昔話大成』と比較しても類話が極めて少ないことがその主な理由である。グリム童話では、分析の対象はいわゆる1857年版KHM200篇、203話である。グリム童話の場合は、1857年版の200篇がグリム童話の決定版であり、KHMに限定すれば類話を可能な限り避けることができるからである。もちろん、グリム童話の場合には、グリム兄弟、とりわけ弟のヴィルヘルムが大いに手を加えて作り上げたことは当然の前提である。ところで、1857年版のグリム童話が200篇、203話となっており、数字が合わないのは、KHM38に2話、KHM39に3話あるからである。KHM105にも3話あるが、第2話、第3話は話としても分

析の対象としても、無視してもよい。

グリム童話のテキストは、BRÜDER GRIMM Kinder- und Hausmärchen Vollständige Ausgabe Mit 184 Illustrationen zeitgenössischer Künstler und einem Nachwort von Heinz Rölleke Artemis & Winkler 1949 Winkler Verlag, München, 19. Auflage 1999である。参考にした日本語訳は金田鬼一氏訳の『グリム童話集』（岩波書店）である。

第I章 グリム童話と『日本の昔ばなし』には結婚の話はどれくらいあるか

第1節 結婚の総数

恋愛結婚の話に入る前に、グリム童話と『日本の昔ばなし』にはいったい結婚の話はどれくらいあるのであろうか。

グリム童話には、結婚の話は全部で83話、結婚は93組ある。グリム童話は全部で200篇、203話であるから、話としては41%ということになる。結婚の数としては、46%である。この数値には、「春になって、男はまた別の妻を迎えました」という類の結婚は、結婚そのものにとっては意味がなく、分析の対象外で、含まれていない。ここでは結婚の中身が問題だからである。もっとも、後妻をもらうそのような結婚も、童話や昔話における継母をテーマにする場合には、あるいは筋の運びの上では、重要な意味を持ってくるのはもちろんのことである。

『日本の昔ばなし』には、結婚の話は38話、49組ある。『日本の昔ばなし』には話が240あるので、話としては15.8%、結婚の数としては20.4%である。

この数値をどう見るかは、見解の分かれるところではある。しかし、グリム童話に結婚の話が半数近くもあるという事実を考えれば、グリム童話にとって、結婚の話はなくてはならないものだと言って差し支えないであろう。『日本の昔ばなし』にとっては、結婚の話は、様々な昔話の種類の中の一つということで、多いとも少ないとも言えない。ここでは結婚の話の単なる数値だけであるが、メルヘンや昔話の種類、結婚が話の主要なテーマになっているかどうか、結婚がストーリーを進めるきっかけに過ぎないか、ストーリーそのものか、ハッピーエンドとしての結婚か、等々、結婚の中身、比重を検討する場合には、この数値の持つ意味もまた自ずと異なってくる。今はこれはテーマではない。

第2節 結婚話の分類

グリム童話と『日本の昔ばなし』に出てくる結婚は、種類と類型の両面から分析することにする。種類というのは、文字通り結婚の種類で、恋愛結婚、魔法からの解放結婚、政略結婚、等々である。ところが、違う種類の結婚、例えば恋愛結婚、魔法からの解放結婚、政略結婚でも、王家と王家の結婚とか、王家と庶民の結婚とかという男女の身分、地位などの面からは同じ型の結婚に分類できる。それを結婚の類型と呼ぶことにする。

1. 結婚の種類

グリム童話と『日本の昔ばなし』の結婚にどのような種類があるかという、次のようになる。「恋愛結婚」、「一方的恋愛結婚」、「仲良し結婚」、「魔法からの解放結婚」、「救出結婚」、「難題解決結婚」、「条件結婚」、「お礼結婚」、「家父長的結婚」、「父の約束結婚」、「父の譲渡結婚」、「政略結婚」、「征服結婚」、「判別結婚」、「処罰結婚」、「押し売り結婚」、「予言・運命結婚」、「替え玉結婚」、「物臭結婚」、「不明の結婚」である。そして『日本の昔ばなし』にのみ見られ

る結婚の種類としては「報恩結婚」、「強引・無理矢理・略奪結婚」、「嵌め結婚」、「通い婚」がある。

ついでに、『日本の昔ばなし』にはまったく見られない、グリム童話の結婚の種類を挙げておくと、「仲良し結婚」、「難題解決結婚」、「父の譲渡結婚」、「征服結婚」、「判別結婚」、「処罰結婚」、「押し売り結婚」、「予言・運命結婚」、「物臭結婚」、「魔法からの解放結婚」、「救出結婚」である。

以上は私のまったく恣意的な結婚の種類分類である。この恣意的な分類に、何らかの意味、何らかの共通点、特徴、規則性等々が出てくれば、この分類も無駄ではなかったことになる。

2. 結婚の類型

さて、結婚をした男女がどういう身分、地位なのか、王家か庶民か、等々の面から結婚を考えると、結婚にはある限られた類型があることがわかる。それは以下のとおりである。

類型 1 男性が王家（殿様家、貴族、長者）で、女性も同じ高い身分

類型 2 男性が王家（殿様家、貴族、長者）で、女性が庶民

類型 3 男性が庶民で、女性が王家（殿様家、貴族、長者）

類型 4 男性が庶民で、女性も庶民

類型 5 男性が神様で、女性も神様

類型 6 男性が神様で、女性が人間

類型 7 男性が人間で、女性が神様

類型 8 男性が人間で、女性が動物

類型 9 男性が動物で、女性が人間

類型 10 男性が動物で、女性も動物

類型 11 男性が人間で、女性が物

類型 12 男性が物で、女性が人間

第Ⅱ章 恋愛結婚について

第1節 グリム童話には恋愛結婚はどれくらいあるか

まず恋愛結婚の簡単な定義をしておく。結婚した男女の内、一方が相手に惹かれているか、好意を抱いているか、惚れているかして、結婚をする意志があること、そして相手も同じ気持ちを抱いているか、あるいは同じ気持ちでなくとも結婚への同意を示すか、示さなくとも結婚への同意が見られる場合の結婚を言う。そうすると、グリム童話には、恋愛結婚の話は21話、23組ある。前述したように、結婚の話は全部で83話（注）、93組であるから、恋愛結婚は、話としては25.3%、結婚の数としては24.7%ということになる。ついでに、第2位を占めるのは、13話15組の結婚がある「魔法からの解放結婚」である。これで明らかのように、恋愛結婚は、結婚話の4分の1を占め、他の種類の結婚に圧倒的な差をつけて、断然1位なのである。つまり、恋愛結婚は、グリム童話の結婚話のなかで、繰り返し登場し、最も好まれている話なのである。

（注）KHM 49, 96, 13, 161, 135 に2種類の結婚があるので、話としては、83話となる。

第2節 『日本の昔ばなし』には恋愛結婚はどれくらいあるか

驚くべき事実であるが、『日本の昔ばなし』には、恋愛結婚は2話、2組しかない。その二つの内の一つ、『雪女房』の男としがま（つらら）の結婚は、後に詳しく論ずることにするが、あえて分類しなければならないとすると「恋愛結婚」に属するであろうが、そう断定することにも少々無理がある、という微妙な性格の結婚である。非常に厳密に考えるならば、『日本の昔ばなし』には恋愛結婚はたった一つしかない、ということもできる。だから、『日本の昔ばなし』では、恋愛結婚は例外中の例外なのである。結婚話の頻度数も最下位か最下位に準ずるものとなっている。私は、この事実そのものが非常に興味深いと同時に、重要な意味を持っていると思う。グリム童話において、恋愛結婚が圧倒的に第1位を占めていることを考えるとき、『日本の昔ばなし』で明らかになったこの事実は、二つの昔話の何か根本的な相違の一つを示しているのかも知れない。

第3節 恋愛結婚の類型について

『日本の昔ばなし』には、恋愛結婚がほとんどないという事実もあって、恋愛結婚の類型の、統計上の意味はほとんどない。しかし、二つしかない恋愛結婚の類型が「類型3」と「類型11」であるということは注目しておいてよい。ちなみに、結婚話全体では、「類型3」が15話、17組で、圧倒的に第1位である。この事実も興味深い。

これに対し、グリム童話では、統計上非常に顕著な特徴が現れている。つまり、恋愛結婚は「類型1」が7話、7組で、「類型2」が6話、8組、「類型4」が7話、7組と、ほぼ均等に現れるが、「類型3」が1話、1組しかない。恋愛結婚を非常に好むグリム童話といえども、身分の低い男性が、高貴な身分の女性と恋愛関係に陥り、しかも結婚にまで行き着くというのは、極めて稀だということである。ところが、この極めて稀な「類型3」の恋愛結婚しか『日本の昔ばなし』にはない（ただし厳密な意味の場合）のである。これまた、奇妙な現象である。

ところで、グリム童話で、「類型3」の恋愛結婚はたった一つしかないと述べたが、それは『リンクランク爺さん』（KHM 196）である。このメルヘンでは、お姫さまと結婚する男については「またお姫さまが非常に愛している男の人がいまして（Do is dar ok en, de mag de Königsdochter so gärn liden,）」と述べられているだけで、男に関しては他には一切叙述がない。したがって、非常に厳密な見方をすれば、男とお姫さまの恋愛結婚は「類型3」だと断定することは難しい。しかしながら、グリム童話では、王子は王子、王女、お姫さまは王女、お姫さま、伯爵は伯爵と、身分の高い人については、普通ははっきりと身分が書かれているので、何もなく、ただ単に男と書かれている場合には、庶民だと断定はできないが、少なくとも、高貴な身分の人ではないとは言えるであろう。グリム童話に「類型3」の恋愛結婚が一つあると述べたが、その中身はこの程度なのである。それゆえ、グリム童話には「類型3」の恋愛結婚は事実上ないと考えても、あながち間違いとも言えないのである。

ついでながら、グリム童話の場合、結婚の総数で言えば、「類型1」が24話、26組、「類型2」が22話、24組、「類型3」が28話、28組、「類型4」が13話、13組である。そうすると、恋愛結婚の話（組）が結婚の話（組）全体に占める割合は、「類型1」が29（27）%、「類型2」が27（33）%、「類型3」が3.6%、「類型4」が54%ということになり、「類型4」の庶民と庶民の結婚では、恋愛結婚が半数以上を占めるという驚くべき数字が現れる。この事実にも大いに意味がありそうである。

第4節 類型別に見た恋愛結婚

1. 「類型1」の恋愛結婚

最初は、KHM6の『忠臣ヨハネス』である。

若い王様は「世界中でこれ以上に愛らしく美しいものはないだろう (es gäbe nichts Lieblicheres und Schöneres auf der ganzen Welt.)」と思われる「黄金の屋根の国の王女の絵姿 (das Bild der Königstochter vom goldenen Dache)」を見て、気を失うほどの「激しい愛着 (eine heftige Liebe)」を覚え、「あの王女へのわしの愛は並ではない。木々の木の葉すべてが舌であっても、このわしの思いは言い尽くせないくらいだ。命を懸けても、あの王女は手に入れるぞ。(meine Liebe zu ihr ist so groß, wenn alle Blätter an den Bäumen Zungen wären, sie könntens nicht aussagen; mein Leben setze ich daran, daß ich sie erlange.)」と、奸策を用いてまで王女を手に入れ、王女と結婚しようとした。そして騙されたことに立腹した王女に対して、王様は内に秘めた熱い思いをはっきりと述べ、王女から結婚の同意を得た。それから王様は、父王亡き後の母の皇太后さまに何ら相談することなく、自分一人の判断と意志で王女と結婚した。それゆえ、この若い王様の意志や感情は相当強いし、彼は、自立的、主体的に行動する独立した人格を持っていると言えよう。

では、王様の結婚相手である黄金の屋根の国の王女の方はどうであろうか。王女は自分が騙されて誘拐されたことに気づいたとき、「ああ、わたくしは騙され、誘拐され、そして商人の手に落ちてしまった。死んだ方がましだわ! (Ach, ich bin betrogen, ich bin entführt und in die Gewalt eines Kaufmanns geraten; lieber wollt ich sterben!)」と言う。これに対して、王様が「商人などではありません。私は国王です。それに生まれも貴女と比べて卑しいことはありません。(ein Kaufmann bin ich nicht, ich bin ein König und nicht geringer an Geburt, als du es bist:)」と答え、「奸策を用いて貴女を誘拐したのも、貴女を強く激しく愛しているからなのです。初めて貴女の絵姿を拝見いたしましたとき、私は気絶して倒れたほどなのです。(aber daß ich dich mit List ertführt habe, das ist aus übergroßer Liebe geschehen. Das erstmal, als ich dein Bildnis gesehen habe, bin ich ohnmächtig zur Erde gefallen.)」と心情を打ち明けると、王女は「安心し、心が王様に傾き、王様のお連れあいになることを喜んで受け入れた。(Als die Königstochter vom goldenen Dache das hörte, ward sie getröstet, und ihr Herz ward ihm geneigt, so daß sie gerne einwilligte, seine Gemahlin zu werden.)」このような王女の態度の豹変ぶりを見ても、王女の感情と意志は強く激しいことが分かる。

しかも、ここには、いわゆる(王様の)恋愛の自由と(王女の)王家という家の利害との激しい葛藤がある。王女は誘拐されたことに怒りを爆発させているが、実は、自分の意志に反して、騙されて誘拐されたことに怒りの真因があるのではない。王家と商家との家の格の違いを強く意識し、最も高貴な家柄の、王家の誇りから、自分が商人の手に落ちたことに激しく反発しているのである。だからこそ、王様は王女のこの怒りに対し、自分の「生まれ」、つまり氏素性、血統をはっきりと述べ、王女をなだめようとしたのである。王様の口説き文句が非常な有効性を持ったのも、この家柄と家柄の平等という前提があってこそである。家柄、氏素性を明かさなかったならば、つまり商人の身分のままであったならば、王様がいかに愛している、「気絶した」と言っても、この王女ならば求婚を受け付けなかったであろう。死を覚悟した絶望から愛と結婚へ、王女のこの急転回の裏に、家の利害と恋愛の激しい葛藤をはっきりと見てとることができる。

王子と王女の恋愛結婚は、メルヘンの筋全体においては、あまり大きな役割を演じていない。全体を貫く太い筋もテーマも、ヨハネスの忠義である。それをキリスト教的なモラルが包む話となっている。

第2番目はKHM9の「12人の兄弟」である。

王様は、森の中の木の上にいた「王女の美しさにまったくうっとりしてしまい」、すぐさま求婚した。そして王女が黙ってうなずくと、王様は王女を連れて帰り、母親に相談することもなく、すぐに結婚式を挙げた。結婚してから母親がたびたび妻のお后を非難したにもかかわらず、王様はそれに耳を貸さず（最後は母親の非難に折れるが）、一言もしゃべらず、笑いもしない、奇妙な自分の妻を擁護する。ここに、王様の強い意志と自立的な判断力がよく表れている。王様には確かな意志と独立した人格がある。

では、王女の方はどうであろうか。王女は、笑うこともしゃべることも出来なかったので、王様の求婚に対して、単に「頭で少しうなずいた（Sie gab keine Antwort, nickte aber ein wenig mit dem Kopf.）」だけであるが、その限られた条件の下で、はっきりと自分の意思を表している。しかし、王女の強靱な意志と忍耐力、強烈な個性が遺憾なく発揮されるのは、王様との結婚においてではなく、このメルヘンのテーマであり、主要なストーリーともなっている兄弟愛においてである。王女は、「7年（初版では12年）」もの間、一言もしゃべらず、笑いもしなかった。そのことで、火あぶりの刑に処され、死を待つばかりになってもである。ただ12人の兄たちを救い出す（鴉から人間の姿に戻す）ために。

王様と王女の恋愛結婚において、家の利害が二人の恋愛を妨げたりすることはない。しかし、王様が最初に美しい娘を見たとき、その人が王女であることを示す「黄金の星」を「額」につけていた、というより、すぐさま「王様がやってきて、額に黄金の星をつけた美しい王女を見つけ、その美しさにまったくうっとりしてしまった（Da kam der König herbei und sah die schöne Königstochter mit dem goldenen Stern auf der Stirne, und war so entzückt über ihre Schönheit,）」くらいであるから、王様には最初から娘が王女であることが分かっていた、王女を前提にその美しさにうっとりした、ともとれる表現になっている。それゆえ、このメルヘンに家の利害が全くないとは言えないであろう。次の事実もそのことを物語っている。つまり、王様が王女と結婚した後、王様の母親が「おまえが連れてきたのは、身分の卑しい乞食娘だよ。神をも恐れぬどんな企みを密かにやっているか、わかりゃしない。おしで、ものが言えなくとも、一度くらいは笑うことができるであろうに。笑わないものは、すねに傷を持っているんだよ。（es ist ein gemeines Bettelmädchen, das du dir mitgebracht hast, wer weiß, was für gottlose Streiche sie heimlich treibt. Wenn sie stumm ist und nicht sprechen kann, so könnte sie doch einmal lachen, aber wer nicht lacht, der hat ein böses Gewissen.）」と、お后を悪く言う場面である。これは、お前が連れてきたのは乞食娘だという極端な非難であるが、王家という家柄に、お前が連れてきたお后はふさわしくないと断言しているのである。それは、王様が自らの自由意志で連れてきたお嫁さんが、王の身分と王家という家柄にあわないということで、自由恋愛と家の利害が衝突している、否衝突させられている。王様個人としては、自分の愛する連合いはたとえ乞食であってもかまわないという考えであるが、この自由な考えも、何があろうと微動だにしないというほど堅固なものではない。

第3番目はKHM50の『野ばら姫』である。

王子は、野ばら姫に会おうとして、すでに幾人もが命を落としているにもかかわらず、「私

は恐れない。出かけて行って、美しい野ばら姫に会う。(‘ich fürchte mich nicht, ich will hinaus und das schöne Dornröschen sehen.’)と云って、野ばら城へ出かけて行く。そして眠っている野ばら姫を見ると、「野ばら姫が大変美しかったので、王子は目を逸らすことが出来ず、身をかがめ、王女に口づけをした。(Da lag es und war so schön, daß er die Augen nicht abwenden konnte, und er bückte sich, und gab ihm einen Kuß.)」すると、野ばら姫は目を開け、「とても懐かしそうに王子を見つめた。(Dornröschen ... blickte ihn ganz freundlich an.)」それから一緒に塔を降り、二人は結婚した。このように、王子にははっきりとした目的と意志がある。

ところが、野ばら姫の方は、意志も感情もあまりはっきりしない。「とても懐かしそうに(親しげに)王子を見つめた」ので、王女に愛情が芽生えていたのであろうが、それ以上はまったく分からない。野ばら姫を一人の人格として見た場合、野ばら姫は単に眠っている美しいお姫さまに過ぎない。王子のどこに惹かれたのかも分からない。100年の眠りから覚め(解放され)、王子との結婚という幸せに行き着いたということだけであり、野ばら姫に人間らしい感情と意志、人格があるのかどうかも疑わしい。もっとも、王子と野ばら姫の結婚は、多分に「魔法からの解放結婚」の要素を持っているので、その面からすると、野ばら姫の行動に何ら不思議な点はない。しかし、これは「魔法からの解放結婚」ではない。王子は魔法を解くための何の努力も苦行もしていないし、野ばら城へ出かけて行った日がたまたま100年目で、野ばら自身が道を開け、王子をお城へ通しているに過ぎないからである。野ばら姫も魔法をかけられているというより、「巫女(女予言者 die weise Frau)」が予言した通り、それは彼女の運命なのである。野ばら姫の場合、明らかに結婚が女性の幸せの象徴になっている。

王子と野ばら姫の結婚に家の利害は無縁である。

第4番目はKHM 53の『白雪姫』である。

王子は、棺の中に横たわっている「美しい白雪姫(das schöne Sneewittchen)」を見て、小人たちに「私は白雪姫を見ていないと生きて行くことが出来ない(, denn ich kann nicht leben, ohne Sneewittchen zu sehen,)」とまで言う。そして白雪姫が生き返ると、「私は世界中のどんなものよりも君を愛しく思っております。私と一緒に父のお城に来て下さい。君を私のお嫁さんにしたいのです。(ich habe dich lieber als alles auf der Welt; komm mit mir in meines Vaters Schloß, du sollst meine Gemahlin werden,)」と云って、白雪姫を口説く。そして白雪姫が王子の求婚に同意すると、すぐさま結婚式が挙げられる。父王にも相談せず、一人で結婚を決めた王子には、自立した意志と感情、はっきりとした気持ち、そして独立した人格がある。このことは、継母の処刑の際にもよく表れている。

他方、白雪姫は王子の求婚の言葉を聞いて、「王子に好意を寄せ、王子と一緒に行き」、結婚式に臨んだ。これでは、白雪姫が王子のどこが気に入ったのか分からないが、おそらく求婚者が王子であったこと、求婚の言葉が誠実ですばらしかったことが白雪姫の心を動かしたのであろう。白雪姫の意志や感情や気持ちはあまりはっきりとは描写されていない。このこととも関連しているが、白雪姫の結婚も、野ばら姫と同じく、結婚は女性の幸せの象徴である。それも継母からいじめられた娘の救いと幸せの象徴である。

白雪姫と王子の恋愛結婚に、家の利害はほとんど関係がない。しかし、白雪姫の棺に「金の文字で白雪姫の名前と白雪姫は王女であると書いて(sie ... schrieben mit goldenen Buchstaben seinen Namen darauf, und daß es eine Königstochter wäre,)」あり、王子は「棺の中の美しい

白雪姫を見た、そしてその上の金の文字で書かれたものを読んだ」とあるので、厳密に見れば、王子は、白雪姫の美しさのみならず、白雪姫が王家の娘であることも認識した上で、結婚を申し込んでいるのである。それゆえ、白雪姫の美しさが王子の心を捕らえた決定的なものとしても、王家の娘だという事実が、王子に何の影響も及ぼさなかったとは言い切れない。こういう意味で、ここにも微かではあるが、家の利害が何らかの役割を演じている。

第5番目はKHM 67の『12人の狩人』である。

王子は、まず王女を「大変愛して (und hatte sie sehr lieb.)」婚約していること、「最愛の人 (zu seiner Liebsten)」という表現もあること、父の臨終の席で、父のすすめる結婚に同意せざるを得なかったとはいえ、最後になって、気を失って倒れた婚約者の王女の指輪を見て、「心を非常に揺さぶられて、王子は王女に口づけをし (Da ward sein Herz so gerührt, daß er sie küßte,)」、「お前は私のもの、私はお前のもの、世界の誰もこのことを変えることはできない。(du bist mein und ich bin dein, und kein Mensch auf der Welt kann das ändern.)」と述べて、父のすすめた花嫁との結婚を断り、元的最愛の婚約者と結婚したところを見ると、心の揺れはあったものの、彼の感情、気持ち、意志は誠実で、強いものであった。

婚約者の王子が父王の薦めた人と結婚することを伝え聞いた王女は、「心変わりに非常に心を痛め、息が絶えそうになった。(Das hörte seine erste Braut und grämte sich über die Untreue so sehr, daß sie fast verging.)」り、それでも、気を取り直し、王子に自分のことを認めさせようと、狩人に変装して王子のお城へ行き、そこで雇ってもらったり、王子のところに花嫁が来る日になると、「悲しみのあまり (拷問のように) 心が締め付けられ、気が遠くなって、ぼったり倒れた (, tats ihr so weh, daß es ihr fast das Herz abstieß, und sie ohnmächtig auf die Erde fiel.)」り、王女は、まるで小説の主人公のような、人間的な熱い情熱を持った人物で、強い意志と自立した人格を感じさせる。

このメルヘンでは、王子と王女の自由恋愛を阻み、王女を悲劇的結末へと追いやりかけたものは、まさに家の利害であった。つまり、遺言で父王がすすめた結婚は、おそらく王家にふさわしい結婚相手か、政略的な結婚だったのであろう。たとえそうでなくとも、父(家)のすすめる結婚と恋愛結婚との間に深刻な矛盾があったことだけは確かである。

第6番目はKHM 136の『鉄のハンス』である。

王子は、あるお城の料理番の見習いになったり、戦争で活躍してその王国を勝利に導いたり、「黄金のリンゴ」取りの祝宴で、お姫様の投げた黄金のリンゴを常にとったり、大活躍をしたあげくに、お姫様をもらうことになったが、この活躍も「鉄のハンス」のお陰であり、阿呆のハンスが活躍したり、愚鈍な末っ子が成功したりすることと大して変わらない。それでも、王子には王子なりの積極性があり、「娘さんを妻に下さい (, gebt mir Eure Tochter zur Frau,)」と言ったりしているところを見ると、それほど強いとは言えないが、しっかりとした意志はある。

お姫さまの方は、前々から庭師の見習い(王子)に興味を示し、王子が「娘さんを妻に下さい」と王様に言った時、笑いながら父王の許可もないのに、みずから「遠慮のない(率直な)方だわ。(der macht keine Umstände,)」と言い、王子のところへ行って、口づけをしている。お姫さまには、父王から独立した意志と感情、決断があると言えよう。

王子とお姫さまの結婚は、恋愛結婚であるが、ここにも王家の家の利害が少し顔をのぞかせている。王子は、国王に「娘さんを妻に下さい」と言う前に、国王に尋ねられたとはいえ、

「私の父は強い国王で、私は黄金も一杯持っております(Mein Vater ist ein mächtiger König und Goldes habe ich die Fülle,)」と自分の身分と家柄をあかしている。それに対して、国王も「それはよくわかっておる(Ich sehe wohl,)」と答えている。そして結婚することになったお姫さまも「あの方が庭師の見習でないことは、あの方の黄金の髪で前から分かっていましたの(, aber ich habe schon an seinen goldenen Haaren gesehen, daß er kein Gärtnerjunge ist;)」と述べている。だから、二人の恋愛の基礎には、それほど前面にはでなかったものの、家柄、血統が同じであるという暗黙の前提がある。二人の結婚はそれをわきまえた上での恋愛結婚だ、と言うことができよう。

第7番目はKHM 198の『乙女マレーン』である。

マレーンという名の乙女と結婚した王子は、脇役であるからか、性格などあまりはっきりしない。乙女を愛し、乙女に結婚を申し込んだこと、父の決めた結婚に従って結婚することになったが、最後の最後に花嫁の代役が乙女マレーンであることに気づき、みずから「お前が本当の花嫁だ。(Du bist die rechte Braut,)」と言ったことから判断して、王子には自立した感情と意志と人格がある。しかしながら、乙女が7年間も塔に閉じ込められていたにもかかわらず、王子は何もせず、「もう死んでいるかもしれない」などと、人ごとのように言う。この点では、乙女を本当に愛しているのかどうか疑わしい。

王子に対して、乙女の意志や感情はきわめて強く、グリム童話でも珍しいほどの独立した人格となっている。乙女マレーンは、愛する王子との結婚を望み、父王が決めた結婚にきっぱりと反対する。「わたくしは他の人をわたくしの伴侶にすることは出来ませんし、する意志もございません。(ich kann und will keinen andern zu meinem Gemahl nehmen,)」このため、激怒した父王によって、真っ暗な塔の中に、7年間も閉じ込められた。それでも意志を曲げず、王子の国に行って、端女になり、自分がマレーンであることを王子に認識させ、結婚にまでもっていった。ただし、端女になって、花嫁の代役をすることになり、王子と接触する機会があったにもかかわらず、自分がマレーンであると、すぐには言わず、端女としての身分をもわきまえていたのか、それとも変わらぬ愛を確かめようとしていたのか、王子自身に自分がマレーンであることを気づかせる、控えめな態度に徹している。

このメルヘンには、自由恋愛を阻む強烈な家の利害が支配している。まず、乙女マレーン側の王家であるが、父王は、自分の決めた結婚に従わず、恋愛結婚に走ろうとする娘を暗黒の塔に閉じ込める。それは、父(家)の支配に従わない娘を殺すことを意味している。事実、娘のマレーン姫は、7年間塔にいて、父王に許されて塔から出たのではなく、じっとしては死ぬ以外になくなった時、腰元と一緒に、自ら塔を削り、脱出したのである。王子はマレーンとの結婚をあきらめたのか、「ぎょっとして後へ跳び下がった」ほど「底抜けの醜い顔」の花嫁と結婚することにし、家(父)に従順に従っている。王子が自ら自立的に振る舞うのは、代理の花嫁がマレーンに酷似していることが分かったときだけである。

2. 「類型2」の恋愛結婚

第1番目はKHM 11の『兄と妹』である。

王様は、継子いじめを逃れて、森の中に暮らす「これまでに見たこともないほど美しい」妹に惚れて求婚し、同意を得ると、お城へ連れて帰り結婚した。そして結婚後、継母とその実の娘に殺された妻の幽霊に対して「お前以外にわしの愛する妻はありえない」と言って、変わら

ぬ愛情を示していることからして、王様には深い愛情と強い意志があると言えよう。

これに対し、妹の方は、結婚に同意したことに、自らの意志と判断を示しただけで、王様に対しては、ほとんど何の反応も示さない。兄に対しては、まるで姉のように、忠告をしたり、意見を言ったり、実にしっかりとした振舞いをしたにもかかわらずである。妹が結婚に同意していたのは事実だとしても、王様のどこが気に入ったのかはよく分からない。妹が彼の求婚に応じたのは、おそらく、小屋に入ってきたのが王様であったことと、優しそうであったためであろう。妹の場合、王様に対する愛情よりも、兄に対する愛情の方がはるかに強い。

王様と妹との恋愛結婚を妨げたり、それと衝突する家の利害は一切無い。

第2番目はKHM 12の『ラプンツェル』である。

塔に閉じ込められていたラプンツェルの歌声に惚れ、塔の中に入って行って求婚し、まるで夜這いのように塔に通ってきた王子は、塔から落ちて失明したにもかかわらず、何年もさまよって歩いて、ラプンツェルを探し出して、国に連れて帰った（正式の結婚をしたかどうか不明であるが）くらいであるから、王子には、熱い情熱と愛、強い意志と独立した人格がある。

これと比べると、ラプンツェルの意志や人格は少し弱い。ラプンツェルが、塔の中に入ってきた王子に最初驚きながらも、王子の求愛に応じたのは、求愛の言葉が真摯ですばらしかったことと王子が「若く美し」かったからである。しかし、ラプンツェルの愛情は変わることなく、しかも強い。

王子とラプンツェルの愛を阻む家の利害はない。女魔法使いの様々な妨害があるだけである。

第3番目はKHM 76の『なでしこ』である。

王子と美しい乙女との恋愛にはどのような感情、意志が表れているであろうか。

王子は、いわば神さまの子で、望むことはなんでもかなう。王子が結婚することになった美しい乙女も、年寄りの料理人の誘いで、祈り出したものである。王子は、年寄りの料理人を「黒いむく犬」に変え、乙女を「なでしこ」に変え、父と母のいる国に帰り、狩人として雇ってもらった。そして料理人の悪事を暴き、母親を救い、「なでしこ」を「どんな画家もこれ以上美しくは描くことが出来ないほど美しい (sie ... war so schön, daß kein Maler sie hätte schöner malen können.)」「乙女(eine Jungfrau)」に変えて、父王に紹介した。ここで、大事なことは、王子は自分の結婚相手が命の恩人であることを父王に説明しているのであって、結婚の許しを得ようとしているのではないということである。王子は自らの意志と判断で行動し、結婚をしている。

ところが、美しい乙女の方は、年寄りの料理人に王子を殺せと命令されたときに、それに逆らったことに、乙女の意志が表れたくらいで、他はまったく意志も感情もなく、無人格である。しかし、その時でさえ「今までに人を侮辱したことの無い、罪のない人の血をどうして私が流すことが出来ましょう。」と言うだけで、たとえば愛する人とか、愛しい人をどうして殺せましょうというようなことは一切言っていないし、たとえ言葉に出して言わなくとも、愛する人を救おうとしている、と読者（聞き手）に感じさせるような振舞いも一切無い。王子から父王に初めて紹介された時も、一言もしゃべらず、挨拶をした形跡もない。また王子のどこが気に入ったのかも分からない。恐らく「二人は一緒にあそび、心から愛し合った。」とあるので、一緒に遊んでいるうちに愛が芽生えたのであろう。

国王の専制的な支配はあるが、王子と乙女の恋愛結婚を阻むような家の利害は見られない。

第4番目はKHM 96の『3羽の小鳥』である。

このメルヘンでは、次女と三女が長女の子供3人を川に放り込み、長女を苦しめるストーリーに起因すると思われるが、王様の行動には目立ったところはほとんどない。王様の意志がはっきり表れるのは、王様と結婚したいと言った長女にその意志を確かめて結婚したときと、壁の小鳥が悪事を暴き、牢屋に放り込んでいたお后を牢屋から出した時だけである。

お后となった長女の方は、王様をお婿さんにしたいと言い、王様にその発言の真意を確かめられ、このわしを夫に持ちたいのかと尋ねられると、「はい」と答える。そこに彼女の意志がはっきりと表明されている。あとは、人柄や考え、意志など一切分からない。

王様と長女の結婚に差し障りのあるような家の利害はない。

大臣と次女、大臣と三女の結婚は、付け足しで、大臣二人の人格も、次女と三女の人格も残虐な性格だということ以外、まったくわからない。

第5番目はKHM 130の『一つ目、二つ目、三つ目』である。

「騎士は二つ目をとても愛していたので、二つ目との結婚を祝福してもらい」、結婚式を挙げた。ここに騎士の愛情はよく表れている。そして父王が健在であり、二つ目を父の城へ連れて帰ったにもかかわらず、結婚に関して父の許しを得ていない。この点に、この騎士の自立性、独立した人格がよく表れている。しかし、それ以外はよく分からない。

騎士と結婚した二つ目の心はもっとわからない。二つ目は、継母とその実の娘の一つ目と三つ目からいじめを受け続けている。ある日、騎士が通りかかり、黄金の実と銀の木の葉をした木を見て、一枝欲しいと言った。一つ目と三つ目ではどうしても折ることのできなかったこの木の枝も、二つ目が試みると、いとも簡単に折れた。二つ目がそれを騎士にあげると、騎士はお礼は何がいいかと尋ねた。二つ目は「あなたさまがわたくしを連れて行って、(飢えと乾き、苦しみと困窮から) わたくしを救ってくださるおつもりならば、幸せにございます。」と答える。他のメルヘンによくあるように、騎士から一緒にお城へ行かないかと言って誘われたわけでもなく、また二つ目に対する好意も示されていないにも関わらず、二つ目はいきなりこう答えたのである。この返答を額面通りに受け取ることはできない。つまり、これは救いは救いでも、恐らく騎士との結婚のことも意識した「救い」の頼み事であろう。女性の方から、しかも身分の低い身で、高貴な身分の男性に直接結婚を申し込むことは極めて困難だからである。恋愛において、女性が自立していて非常に積極的なグリム童話といえども、女性からの求婚は一つもない。一つ目と三つ目が二つ目を除け者にして「若い騎士」の気を引こうと競い合っていること、二人が、二つ目が「美しい騎士の男性」の馬に乗せてもらい、お城へ連れて行ってもらったのを見て、羨みながら自分たちの幸運(結婚)も祈っていることを考えれば、二つ目にも結婚願望があったと見るのが自然であろう。ただし、そこに、二つ目の結婚願望が表れているにしても、それがただちに騎士に対する愛情だと断定することも難しい。前後の脈絡から、二つ目にもおそらく「美しい殿方」「若い騎士」への憧れのような感情はあったであろう。それゆえ、騎士と二つ目の結婚は恋愛結婚であると思われるが、そう断定することも困難である。しかし、だからといって、二つ目に対する騎士の一方的な恋愛結婚だと言う方がもっと困難である。もっとも、これはすべての分類に必ず付随する境界線上の困難ではある。

騎士と二つ目の結婚を妨げるような家の利害は、父王が健在であるにもかかわらず、存在しない。

第6番目はKHM 186の『本当の花嫁』である。

「若く美しい」娘の心をつらえ、娘と婚約した王子は、心変わりをしたり、美しい娘に心を

奪われたりするところがあり、若干頼りないところはあるが、婚約した最初の娘への愛情は最後まで持ち続けている。王子は、娘との婚約後すぐに「私たちの結婚に対する父の同意をもらってくる(ich will heimziehen und die Einwilligung meines Vaters zu unserer Vermählung holen;)」と言っている点では、まだまだ十分に自立したしっかりした人物とは言えないが、別の人との結婚式を挙げる寸前に、以前の婚約者を思いだし、誰の同意も得ず、自分一人の判断で、すぐさま本当の花嫁を花嫁の城へ連れて帰り、父王も出席しない中で結婚の儀式を執り行った面では、完全に独立した人格となっている。

王子と婚約した娘は、婚約後王子に忘れ去られたにもかかわらず、王子を捜しに旅立つ。そして農家の家畜の番人になっていた時、王子が他の女の人と結婚するという事態に遭遇する。このように娘は「最愛の人」に見向きもされず、「鋭い包丁で心臓をえぐられるような」目に遭う。それにもかかわらず、娘は最後には王子に自分が本当の花嫁であることを認めさせた。ここに、彼女の強く激しい、変わることをない愛情がよく表れている。またこの娘は、継子いじめにも耐え抜いた、比較的強い意志と強運を持っている。

王子と娘の恋愛結婚を妨げるような家の利害はないと言えようが、王子が別の人と結婚することになったのだから、何らかの利害は働いている。ただ、この結婚が父王のすすめによるものなのか、自分がまた好きになって選んだ人との結婚なのか、まったくわからないので、判断のしようがない。いずれにせよ、王子は婚約したことも、婚約者のことも忘れて、新たに結婚式を挙げようとしている。それが健忘症ゆえなのか、浮気性ゆえなのか、魔法やまじないをかけられたためなのか、まったく理由が分からない。結婚式のお祝いの席にやってきた「本当の花嫁」の「美しさにまったく心もとろけ、別の花嫁さんのことはもはや頭にまったくなくなり (Er war so entzückt über ihre Schönheit, daß er an die andere Braut gar nicht mehr dachte.)」、彼女との舞踏に夢中になったところを見ると、王子は美人に弱い、浮気性なのかも知れない。結婚をするという段になって、結婚の祝宴の席で、他の美しい人に突如として惚れ込むとは、立ち止まって考えると、異常としか言いようがない。少し勘ぐりすぎになるが、本当の花嫁が王子の結婚式を前にして、もうどうすることもできなくなり「ではいよいよ最後の手段(奥の手)を使ってみましょう。(Nun will ich das letzte versuchen,）」と言ったのは、そういう王子の性格をうすうす感じていたからであろうか。明らかなことは、娘との結婚を自分一人で決められず、父王の同意を得ようとしたことである。そこに家の利害があらわれていると言えないことはない。しかし、最後は、誰の何の許しも得ず、本当の花嫁と結婚式を挙げたのだから、かすかな家の利害にも関わらず、王子は主体的に行動できる状態にはあったと言える。

3. 「類型3」の恋愛結婚

すでに述べたように、結婚話が好まれ、なかでも恋愛結婚が圧倒的の第1位を占めるグリム童話といえども、庶民の男性とお姫さまの「類型3」の恋愛結婚は、たった一つしかない。それは『リンクランク爺さん』である。

ある王様がガラスの山を駆けて越え、転ばない者にお姫さまを嫁にやることにしていた。ところが、お姫さまには好きな人がいて、お姫さまはその人を私が助けてあげると誘って誘い、一緒に山を駆けたが、ガラスが割れ、お姫さま一人深い深い地の底に落ちていった。地の底にはリンクランク爺さんがいた。お姫さまは爺さんの召使いにされ、長年働かされたが、リンクランク爺さんを騙して自力で地の底から脱出し、お城に帰った。それから昔の恋人をお婿さん

にした。

お姫さまが男の人に好意を寄せていることははっきりとしているが、男の人も、お姫さまをいただけるかどうかと、王様に尋ねているので、好意を持っていることが分かる。しかし、それ以外は男はまったく影が薄い。性格も人柄もわからない。しかし、お姫さまは、普通の話と違い、男の人を助けてあげると言って自ら積極的に難題に立ち向かったり、自力で地の底から脱出したり、最後は、まったく何も行動せず、ただ単にお城にいただけの恋人を「お婿さんにした (Do kricht de Königsdochter den ollen Brögam noch ton Mann,)」(恋人のお嫁さんになったという受動的表現でないことに注意!)り、最初父王から単なる「モノ」扱いされていたにもかかわらず、終始積極的で主体的な行動をとっている。普通は身分の低い男がお姫さまを獲得しようと積極果敢に行動するのであるが、この場合はまったく逆である。また、王様は難題を解決した者に娘をやると言ったほど家父長的なのに、その条件に合わない二人の結婚に何の関与もしない。このメルヘンは結婚の「類型」からも極めて例外的であるが、話の中身も首を傾げたくなるほど特異なことが多い。

4. 「類型4」の恋愛結婚

第1番目はKHM 13の『森の中の3人の小人』である。

男やもめと女やもめの結婚は、このメルヘンのテーマでもないし、ストーリーからもほとんどはずれている。この二人の結婚は、継子いじめに入る前提にすぎない。したがって、二人の性格もあまりよく表現されていない。

男やもめの方は、結婚の楽しみと苦勞を知っており、結婚に踏み切ること躊躇する。そこで長靴占いで結婚を決める。その後、この男やもめはまったく登場しない。

女やもめは、男やもめと積極的に結婚しようとする。結婚後、この女やもめは継子いじめを始める。その継子娘が王様と結婚し、男の子を産むと、継母と実の娘は、二人してお后を川に放り込んで殺す。ここに、女やもめの激しく邪悪な性格がよく表れている。

男やもめと女やもめの結婚に家の利害はまったくない。

第2番目はKHM 56の『最愛の恋人ローラント』である。

魔法の(殺害の)襲撃から逃れた継子娘の、恋人ローラントに対する愛情は、強く深い。それは、ローラントに忘れ去られたことへの彼女の悲しみ、苦悩の深さによく表れている。彼女は、恋人が戻ってこないことが分かったとき、死を決意したし、恋人の結婚式に出なければならなくなったとき、「心臓が破裂」しそうになった。この深い苦悩は愛情の裏返しである。また、羊飼いの求婚を断り、操を立てたことにもよく表れているが、彼女の愛は一途で、心変わりしない。しかし、この炎のように激しい愛情を持った娘も、その振る舞いはまことに控えめである。しかし、誰からも指図を受けず、自分自らの判断と意志で行動している。

これに対し、ローラントは、「今から父のところへ帰り、結婚式の準備をします。(‘nun will ich zu meinem Vater gehen und die Hochzeit bestellen.’)」と言って、父のところへ帰り、「他の女の畏にはまり」、娘のことを忘れてしまう。しかし、自分の結婚式に来た娘の歌声で、その娘が元の恋人だとわかり、娘と結婚した。その時のローラントの言葉「あの声は知っている。あれが本当の花嫁だ。あれ以外の花嫁は欲しくない。」には、彼の変わらぬ愛情がよく表れている。

二人の結婚と家の利害は何の関係もない。ローラントが父のところへ帰り、畏にはまって恋

人のことを忘れてしまうが、それは父に結婚の許しを得るためでなく、「結婚式の準備を」するためであった。そして最後に本当の花嫁に気づいたローラントは、自分一人の意志と判断で本当の花嫁と結婚する。父親の陰はみじんもない。

第3番目はKHM 69の『ヨリンデとヨリンゲル』である。

ヨリンデとヨリンゲルは「お互いにとっても愛し合っていた」婚約者である。

魔法使いによってナイチンゲールに変えられ、魔法使いのお城へ連れて行かれた恋人のヨリンデを、ヨリンゲルは夢をヒントに、救い出して結婚する。彼に強い愛情と意志があることはこれで十分分かる。

ヨリンデの方は、登場してくるやいなや、ナイチンゲールに変えられ、お城へ連れて行かれるので、彼女の意志や人格はよく分からないが、ヨリンゲルを愛していたことだけは確かである。

二人の結婚と家の利害は何の関係もない。ただし、結婚したとか、結婚式を挙げたという叙述はない。二人の結婚も「魔法からの解放結婚」に似ているが、魔法から解放されたことが結婚の契機となったわけではなく、魔法にかけられる前から恋愛関係にあり、婚約していたので、分類上は、事件はあったものの「恋愛結婚」である。

第4番目はKHM 85の『黄金の子供』である。

黄金の子供は、村の美しい女の子に「僕は心の底から君が好きだ。僕のお嫁さんになってくれない？」と求婚しているので、彼の愛情は確かなものである。

これに対し、その女の子も「いいわ。わたしあなたのお嫁さんになるわ。そして一生あなたに操を立てるわ。」と答えて、父がまだ家に帰らぬうちに結婚式を挙げているし、父の猛反対にもかかわらず、「わたし心底からあの方が好きなの。」と、父に反発しているところを見ると、彼女には強い愛と強烈な自我があることがわかる。

一見すると、黄金の子供と村の女の子の結婚の前には、父の猛反対という家の利害が立ちだけかっているように見えるが、父の反対は根深いものではなく、黄金の子供が熊皮男で、乞食と見えたからである。それゆえ、父親は、熊皮男が皮を脱いで黄金の姿で寝ているのを見ると、すぐに気持ちを変える。したがって、この反対は個人的な嗜好の問題だと言えよう。もちろん個人的な嗜好の問題にも家の利害は反映してはいるが。

第5番目はKHM 115の『明るいお日様に隠し事はできない』である。

仕立屋は親方の娘に惚れて結婚したのであるから、愛情があったことは確かである。

親方の娘は、仕立屋をどう思っていたのか、よくわからない。しかし、仕立屋は自分の家に住み込んでいる職人であるし、そのよく知っている人に惚れられ、結婚して「仲のよい、楽しい結婚生活を送った」のであるから、娘にまったく何の好意もなかったとは言えないであろう。二人の結婚を仕立て屋の一方的な恋愛結婚として分類するには無理がある。それゆえ恋愛結婚に分類する。

二人の結婚と家の利害はまったく衝突しない。

第6番目はKHM 122の『キャベツろば』である。

魔女とその娘にだまされ、遠くの「ざくろ石山」に置いてきぼりにされた狩人は、自らの知恵と力で、魔女に復讐し、魔女を殺す。そして魔女の娘と結婚する。狩人は、美しい「娘にぞっこん惚れ込み、他のことはもう考えられず、娘の顔色ばかりうかがい、娘の要求することは何でも喜んでした。」のであるから、その惚れ込みようは並でない。魔女の娘も狩人を愛してお

り、振舞いも誠実である。

狩人と魔法の娘との結婚に家の利害は何もない。

第7番目はKHM 181の『池の水の精』である。

狩人は、村の「美しくて誠実な（操の堅い）娘」が「気に入る」、結婚したのであるから、愛していたことは確かである。その後、男は池の水の精に池の中に引きずり込まれ姿を消すが、最後に救われて、最愛の妻と巡り会い、「抱き合い、口づけを」する。ここにも、狩人の変わらぬ愛があることが分かる。

狩人と結婚した村の娘も、狩人を知っていたであろうし、結婚後「心から愛し合っていた」のだし、池の中に姿を消した夫を救い出そうと必死になり、「白髪のおばあさんの助け」で、結局夫を救い出したのであるから、妻の愛と意志も相当強いと言えよう。

狩人と村の娘の結婚にも家の利害の陰はない。

以上、注意すべき点を表にまとめてみると、次のようになる。

		惹かれたところ		結婚に対する意思の強弱		家の利害	結婚への父母の反対	結婚生活の幸不幸	結婚がテーマか
		男	女	男	女				
類型1	忠臣ヨハネス6	schön, herrlich	王故、口説き文句	強	並	最強(姫)	無(母)	幸福	×忠心
	12人の兄弟9	schön	王故?	並	最弱	有(母)	(結婚後) 猛反対(母)	幸福	×兄弟愛
	野ばら姫50	schön	王子故?	並	最弱	無	無	幸福	○
	白雪姫53	schön	王子故、求婚の言葉?	並	弱	最弱(王子)	無(父)	?	×お後の嫉妬
	12人の狩人67	schön	?	並	最強	有(父)	無(母)	?	○
	鉄のハンス136	?	金髪、立派さ、活躍?	並	並	弱	無(喜ぶ)	?	×王子の冒険
	乙女マレーン198	wunderschön	?	並	最強	最強(父)	無(父母)	幸福	○
類型2	兄と妹11	schön	王故、優しさ?	並	最弱	無	無	幸福	×継子いじめと兄弟愛
	ラプンツェル12	einen so lieblichen Gesang, ihre süße Stimme	口説き文句、若く美しい	強	並	無	無	幸福	△魔法使いの幽閉と恋愛
	なでしこ76	schön	幼友達?	並	並	無	無	?	×神童の運命
	3羽の小鳥96	schön	王故?	弱	並	無	無	不幸から幸福へ	×妹二人の姉いじめとお姫様の活躍
		schön?	大臣故?	弱	並	無	無	不幸	
		schön?	大臣故?	弱	並	無	無	不幸	
	一つ目、二つ目、三つ目130	schön	騎士故?	並	最弱	無	無(父)	幸福	×継娘いじめ
本当の花嫁186	schön	王子故?	並	最強	無に等しい	無	?	△継娘いじめと恋愛	
類型3	リンクランク爺さん196	?	?	弱	並	無	無(父)	幸福	×王女の奇異な運命

類型4	森の中の3人の小人13	?	?	弱	強	無	無	不幸	×継娘いじめ
	最愛の恋人ローラント56	schön	?	並	最強	無	無	?	×魔女からの逃亡と恋人の事件
	ヨリンデとヨリングエル69	schön	美しさ?	並	並	無	無	幸福	△魔法からの解放物語
	黄金の子供85	schön	?	並	最強	無に等しい	猛反対から賛成へ(父)	幸福	×黄金の子の冒険
	明るいお日様に隠し事はできない115	schön	?	並	最弱	無	無	不幸	×悪事は隠しとおせない
	キャベツろば122	schön	?	最強	並	無	無	幸福	×狩人の冒険
	池の水の精181	schön	?	並	並	無	無	幸福	×水精物語

第III章 グリム童話と『日本の昔ばなし』の恋愛結婚の総括的な比較

さて、表からどのようなことが分かるであろうか。

恋愛結婚なので、まず主として結婚に至るまで、あるいは婚約後、男性と女性のどちらが思い入れが強いのか、どちらがより強く惚れているか、どちらの愛がより強く激しいかを考察してみよう。「類型1」では、男性の愛が強いと思われるのは4例、女性の愛が強いと思われるのは2例、男女同じほど強いと思われるのは1例である。「類型2」では、男性が強いのは3例、女性が強いのは2例、男女同じは3例である。「類型4」では、男性が強いのは2例、女性が強いのは3例、同じは2例である。全体で見ると、男性が強いのは9例、女性が強いのは8例、同じは6例である。統計的に見るならば、類型別でも全体でも、男性と女性の思いや感情、愛は、恋愛結婚というだけあって、つまり、感情の面で平等のはずの恋愛というだけあって、メルヘンの世界でも、家柄や血統、氏素性、身分や地位にかかわらず、ほぼ対等とも言えよう。否、19世紀前半までの、ドイツやヨーロッパの男性主体の歴史を考えると、恋愛結婚という限られた領域においてはあながち、グリム童話というメルヘンの世界では、対等というよりもむしろ、女性の自立性と主体性、意欲的で積極的な行動が際だっていると言った方が適切であろう。とりわけ、乙女マレーンの堂々とした態度と行動は目を見張るものがある。彼女は、父王が決めた結婚に対し「わたくしは他の人を私の伴侶にすることはできませんし、する意志もございません。」ときっぱりと断り、自分の愛する王子との結婚を選択する。このことで、7年もの間暗黒の塔に閉じ込められても、意志を曲げず、自らの力で塔を脱出し、危機を乗り越え、愛する王子と結婚した。このような強く激しい、一途の愛に生きる、自立した女性像は、『日本の昔ばなし』には決して見られない。

ところが、対等に見える恋愛結婚において、よく見ると、男性と女性の意識には大きな差異があることに気づく。つまり、男性が女性のどこに惚れたかは非常にはっきりしているが、女性が男性のどこに惚れたかはほとんど分からないのである。これは、男性は女性のどこを評価し、女性は男性のどこを評価しているかという問題でもある。この問題は、いやこの問題こそ、「類型」に分ける必要は全くない。庶民がお姫様をもらおうということは、どんなお姫様であれ、それだけで幸福と出世を意味するがゆえに、お姫様の美しさを叙述する必要のない「類型3」を除いた22組の結婚の中で、男性が女性のどこに惚れたかが分からないのは、『鉄のハンス』と『森の中の3人の小人』だけであり、他の20はすべて女性の「美しさ」に惚れている。『鉄

のハンス』では、お姫さまを形容する語が何もないだけで、美しくないとは書かれていない。これは、王子がお姫さまのお城の庭師の見習いとなっており、形の上では、卑しい身分の者が最も高貴な身分のお姫さまをお嫁さんにもらうというメルヘンの設定と関係がありそうである。『森の中の3人の小人』では、男やもめと女やもめの結婚は、結婚そのものとしても、ストーリー全体からしてもほとんど意味がない。最初に分析の対象から外した「後妻」の種類であり、無視してもよいくらいのものである。それゆえ、女性に美しいという形容がないのもうなずける。ちなみに、『ラプンツェル』では、ラプンツェルが塔の中に入れられており、姿が見えないこともあって、王子は女性の声の「lieblich」さと「süß」さに惹かれているに過ぎない。しかし、想像力では、金色の美しい髪の毛をしたラプンツェルは、その容姿の美しさも浮かんでくる。実際、*Rapunzel ward das schönste Kind unter der Sonne.* と、ラプンツェルは世界で最も美しいと叙述されている。そうすると、結論は明らかである。グリム童話では、男性は女性の「美しさ」に惚れているのである。男性にとって、女性は美しければよいということになる。これがグリム童話における男性の女性観である。恋愛結婚以外の他の種類の結婚は、必ずしも女性の「美しさ」だけが結婚の条件ではないので、これは恋愛結婚における男性の女性観だと言えよう。このことは、「抽象的様式」(『ヨーロッパの昔話』マックス・リュートィ著、小澤俊夫訳：岩崎美術社)といういわゆるマックス・リュートィの童話の理論だけで説明することは困難であろう。

女性はどうかであろうか。23組の結婚の中で、女性が男性のどこに惚れたかがはっきりと分かるのは、『忠臣ヨハネス』と『ラプンツェル』の二つしかない。前者では、男性が王様であること、口説き文句が真摯で嘘偽りを感じさせなかったことであり、後者も、王子が若く美しく、その愛の告白が誠で真剣であったことであろう。後は、まったく分からないか、想像力をたくましくしなければ分からない。女性の感情や意志が最も強く表れる恋愛結婚においてさえ、女性の男性観は、このように曖昧模糊としているのであるから、他の種類の結婚においては、意志や感情はもちろんのこと、女性の人格すらないことは容易に想像がつくであろう。これは、女性にとっては、結婚が人生のゴールであったことがメルヘンの世界に反映された結果であろう。結婚が女性の幸せと救い、出世、成功の象徴となっているのである。

次は、しばしば自由恋愛の妨げとなる家の利害について考察してみよう。「類型1」では、家の利害がまったく顔を出さないのは『野ばら姫』ただ一つである。後は、程度の差こそあれ、何らかの家の利害が頭をもたげ、自由恋愛との葛藤に陥る。『忠臣ヨハネス』では商家と王家との葛藤が、『12人の兄弟』では王家と身分の卑しい乞食との葛藤が、『12人の狩人』では父王の遺言の結婚と恋愛との葛藤が、『乙女マレーン』では父王の決めた結婚と恋愛との葛藤が見られる。『白雪姫』と『鉄のハンス』では、王家同士を前提とした恋愛という意味で、家の利害がかすかに出ている。しかし、意外なことに、いざ結婚となると、親の反対は全くなく、恋愛がすんなりと結婚へと結実している。唯一母親が猛反対している『12人の兄弟』も、猛反対は結婚後の話であって、結婚をするときではない。さて、表を見れば一目瞭然だが、王家の男性と庶民の女性の結婚の「類型2」と庶民同士の結婚の「類型4」になると、家の利害はまったく姿を消す。「類型4」で、恋愛結婚が結婚話全体の半数以上を占める理由の一つはここにある。しかし、庶民のレベルにおいてさえ、恋愛結婚が一般的であるという事情は、『日本の昔ばなし』にはまったく見られないし、現実の世界でも、明治以降も、つい最近(20世紀後半)までそういうことはなかった。ところで、グリム童話の場合に、「類型4」に家の

利害がないことは容易に理解できるとしても、「類型2」に家の利害がまったく現れないのは驚きである。王様や王子がどこの生まれとも分からない庶民の娘を結婚相手としてお城へ連れて帰っても、父王やお後の反対が全くないのである。王家という最も由緒ある家においてである。このように、メルヘンの世界では、恋愛結婚における個人の自由は何の妨げもない。メルヘンの世界では、現代社会の恋愛結婚さえも越えた、最も進んだ自由と愛を謳歌している。グリム童話の魅力の一つ、現代の社会においても子供たちに夢を与え続ける力の源泉の一つはここにあるのかも知れない。

さて、自由な恋愛に基づいて結婚した二人の結婚生活は幸せなのであろうか。結果は明白である。結婚生活について何の叙述もない「不明」を含めて判断すると、結婚生活に不幸はない、ということになる。不幸な結果に終わった『3羽の小鳥』、『森の中の3人の小人』、『明るいお日様に隠し事はできない』は、夫の悪事がばれて処刑されたり、妻が悪事を働いて処刑されたり、悪者に騙されて牢屋にぶち込まれたりして結婚生活が破綻したのであって、結婚そのもの、あるいは結婚した二人の人間関係に起因した不幸ではない。恋愛結婚そのものは幸せな結果をもたらしているのである。これもグリム童話の魅力の一つであろう。

最後に、読者の心を捕らえるメルヘンの世界の恋愛と結婚ではあるが、それが意外とメルヘンのテーマとはなっていないということを指摘しておく。恋愛結婚が疑いもなくメルヘンのテーマになっているのは、『野ばら姫』と『12人の狩人』と『乙女マレーン』だけである。すべて「類型1」の王家と王家の恋愛結婚である。庶民と庶民の結婚の「類型4」では、恋愛結婚はまったくテーマとなっていない。この種の恋愛結婚はメルヘンのテーマにふさわしくないのかも知れない。「類型2」もテーマとなっていないが、ここでは、継母からいじめられたり（3話）、塔に幽閉されたり、妹達にいじめられたりしていた庶民の娘が恋愛結婚という形で救われる話となっている。したがって、結婚そのものがテーマとはならないのだと思う。

「類型3」はただ一つしかない。『リンクランク爺さん』だけである。結婚の話が全体の4割を越え、その4分の1を恋愛結婚が占めるグリム童話なのに、庶民の男性と王家の娘の結婚の話がたった一つしかないということは、何を意味しているのであろうか。

童話の美学的考察を脇に置くと、次のような事情が（グリム兄弟の頭脳を媒介とした）メルヘンの世界にも何らかの形で反映していることが考えられよう。つまり、身分の低い男性、とりわけ庶民が、身分の高い女性、なかでも頂点にいるお姫さまに好意を抱いて結婚するということが、非常に困難であるか、社会的に許されていなかったということである。騎士でさえ身分の高い女性には恋をしても結婚することは許されなかった。それが騎士道というものである。『若きヴェルターの悩み』もその一例であろう。古くはギリシア悲劇の『エレクトラー』（エウリピデース作）もそうである。アガメムノーンの娘エレクトラーが嫁がされた農夫は、農夫とは言っても、卑賤な家柄ではなく落ちぶれて貧しいだけなのであるが、自分の身分をわきまえて、貴人の妻エレクトラーの閨を犯そうとせず、名目上だけの夫に甘んじ、実に騎士的な男を演じている。これがアテナイの社会制度でもあったのだ。

次に、女性とりわけ身分の高い女性は、男性に比べて、行動の自由が極めて限られており、したがって恋の自由、自由恋愛の許される範囲も非常に狭かったこと、王侯貴族以外の庶民に思いを寄せ、結婚にまで至るということの困難さ、非現実性も指摘できよう。恋愛は、少なくとも感情面に限定するならば、男女平等である。しかしながら、身分の高い貴婦人が自分を矚め、身分の低い男性と同じレベルにまで下がり、対等の立場で結婚するということが、身分制

度の揺るがない社会にあっては、ほぼ不可能であった。王家、貴族の家の利害がそれを許さなかったであろう。

また古代ゲルマン社会からグリムの時代に至るまでの家族制度（ジッペ、大所帯家族、小家族）では、女性が結婚し家庭にはいるということは、今以上に夫に服従し仕えるということの意味していた。このことを考慮するならば、お姫さまが、手柄も功績もなく、恩も感じない一介の庶民の男性にたとえ好意を抱くことはありえても、そのような男性と結婚し、服従して仕えるというところまでいくことはまずありえなかったであろう。

『日本の昔ばなし』には恋愛結婚は二つしかない。『雪女房』と『謎婿』である。前者は、ひとり者の男がしがま（つらら）を見て、「あつたに細くてきれいな女がおらの嫁こになって来たら、どんなによかべ」、「あつたら嫁こ欲しいな」と言うと、本当にしがまが女になって夜に訪ねてきて、結婚した、ところが女房の嫌がるお風呂に入れると姿形がなくなった、という話である。これは一応「恋愛結婚」に分類したが、この結婚は、人間と動物どころか、人間と物との結婚である。本来の恋愛結婚とは趣を異にする。グリム童話には全くない種類の話だ。この結婚は、男（人間）が自然を美しいと感動し、自然に憧れ、自然と一体化したいという願望が現実のものとなったと見るのが自然であろう。人間が自然の中で、自然と共に生き、自然を愛でる、そういう純粋な気持ち、生き方が恋愛結婚という形になって語り継がれたのであろう。人間は自然の恵みを受けたり、また逆に自然の恐さ、力を思い知らされたりしながら、自然と共に生きてきた。だから、自然に反すること、自然に逆らうこと、自然の嫌がることをすれば、自然は人間に復讐をしたり、反作用を及ぼしたり、人間にとってよくない結果、人間の望まない結果をもたらしたりするものである。こういう意味で、この昔話は、人間と自然の関わり合いが、神秘的で滑稽に描かれた話とみなすのが妥当であろう。

そうすると、グリム童話と比較できるような恋愛結婚は、後者の『謎婿』ただ一つということになる。この数の少なさに最も重要な意味がある。恋愛は、少なくとも意志・感情面に限れば、男女平等であるし、女性の自由と自覚が前提である。つまり女性の自我の覚醒が不可欠である。ところが、結婚となると、それだけでは十分でない。家の利害を克服することが必要なのである。これが『日本の昔ばなし』にはないに等しいということである。グリム童話で、恋愛結婚が2位の倍近くある圧倒的1位だということを考えると、両者の違いはあまりにも著しい。しかし、これは統計上、形式面での考察である。

『謎婿』の内容はどうであろうか。これは、有馬温泉で湯治をしていた若者と長者の一人娘が恋に落ち、娘が帰り際に残していった謎の言葉の意味を男が解読し、長者の家を訪ねて行って、結婚するという話である。これだけなら普通の恋愛結婚である。ところが、この長者の娘は、親の決めた結婚を、せつない思いを抱きながらも、拒否はしない。また、別の人の所へお嫁入りするときに、自分の乗った花嫁駕籠を担ぐ奉公人が有馬で会った恋人であることが分かったときも、結婚したい人がいると、自分の恋心を親に打ち明けることはしない。ただ恋の病に陥り、体が親の決めた結婚を拒否しただけである。娘が恋愛をしたところを見ると、娘に自我の覚醒はある程度あるが、家の利害を拒否し、はっきりと自己主張するほどの強い自我はない。娘が昔の恋人と結婚したときも、「とうとうその若者が蟬屋の婿になることにきました。それから、あらためて娘と盛大な祝言の式が挙げられ夫婦になることができたということです。」と、最後の最後まで、二人の意志や人格（この場合は娘が問題）は埋もれたままで、表に出てこない。二人以外の何者かが、恐らく家（父）が二人の結婚を決めたのであろう。婿になるこ

とに「きまりました」と夫婦に「なることができた」という表現がそれを如実に物語っている。娘の意思は（また男の意思も）ゆるぎない家の支配の下で沈黙している。強烈な個性、自立した意志と感情を持つ乙女マレーンや『最愛の恋人ローラント』の継子娘、『本当の花嫁』の娘などと比べると、長者の娘はあまりにも控えめで、おとなしく、内向的である。このことは、一言で、日本人的であると言えるのかも知れない。グリム童話との大きな違いである。しかし、恋愛結婚のような、真剣でまじめな話、それ自体で人々をぐっと引きつける恋と結婚の話がユーモアたっぷりに語られるところが、グリム童話にはまったく見られない、『日本の昔ばなし』（『謎婿』と『雪女房』）の特徴であり、魅力ではある。